

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520301

研究課題名(和文)ルネサンス演劇における演技と観客の情緒的・身体的反応の関連性についての研究

研究課題名(英文)The Study of the Correlation between Acting and the Audience's Emotional and Physical Responses in Renaissance Drama

研究代表者

中村 未樹(NAKAMURA, MIKI)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：00324872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はルネサンス演劇における演技と観客の情緒的・身体的反応の関連性について考察を行った。主に16世紀末から17世紀初頭までのイングランドにおける演劇作品と演劇関係資料の調査を行った。パーソネーションという当時の新しい演技様式に焦点を当て、その例としてエドワード・アレン及びリチャード・パーベッジの演技を分析するとともに、この二人の役者の演技が誘起した観客反応について考察し、パーソネーションと観客の情緒的・身体的変化の関係性について検討した。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the correlation between acting and the audience's emotional and physical responses in Renaissance drama. It analysed dramatic works and theatrical documents in England in the late sixteenth and early seventeenth centuries. Focusing on personation, a then emergent acting style, my research examined the acting of Edward Alleyn and that of Richard Burbage. Furthermore, it considered the audience responses that would have been elicited by each actor's performance and illuminated their relation between personation and the audience's emotional/physical changes.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ルネサンス演劇 演技 観客反応 身体 情緒

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を着想する契機となったのは、平成19年から21年度まで科学研究費補助金(若手研究B)の支給を受けて行われた「イギリス演劇におけるリアリティ構築と観客反応に関する研究」と題する調査である。この研究では、ルネサンス期の英国における舞台表象がいかに観客を引き付け、現実的なものとして認知されていくかという問題について考察を試みた。この研究の過程において、役者とその演技というものがこの時代の演劇において重要性を持っていることを改めて認識するようになった。舞台装置があまり存在しなかった当時の劇場においては、役者が劇世界を構築していくための中心的な要素であったのである。また、ルネサンス期のイギリスにおいては様々な演技のスタイルが存在していたことも確認した。中世以来の伝統的な型に基づく演技が残存している一方で、16世紀末においては、登場人物になりきったかのような演技、つまりパーソネーションと呼ばれたスタイルも現れているのである。

これらの異なる演技の形式は、観ている観衆に、それぞれ違った印象を与えたのではないと思われる。実際、当時の英国の舞台に関する一次資料には、例えば、型に基づく演技を誇張されたなものとして否定的に捉えた見解や、役者の迫真の演技に心を打たれて涙を流し、溜息をもらしたという女性観客に関する観劇の記録も残っている。このような観客の様々な反応に関して、より詳細な分析を試みたいと考えた。つまり、演技の特徴・スタイルに応じて生じる観客反応を、感動や共感、嫌悪感などの情緒的側面、そして涙を流すなどの身体的側面の双方を考慮に入れて検討し、最終的に、演技と観客反応の関連性についての議論を体系的に構築していくことができるのではないかと考えるようになった。

ルネサンス期の英国の舞台における演技については、国内においては、河合祥一郎先生の御著書をはじめとする先行研究があり、観客反応に関しては、喜志哲雄先生、笹山隆先生による名著が出されている。また、国外においては、Andrew Gurr、Michael Hattaway、Tiffany Stern、Simon Shepherd、Janette Dillon、John Astington、Emma Smithなどの研究者による文献実証的な研究が行われている。これらの先行研究における研究成果を基礎として、そしてさらに、劇場経験に関する幾つかの学問的アプローチ

例えば演劇記号論、動作学、パフォーマンス・スタディーズなどを参照することによって、ルネサンス演劇における演技と観客反応の関係性という問題を解明するための視点を本研究を通して構築していきたいと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、ルネサンス演劇における演技と観客の情緒的・身体的反応の関連性について考察することを目的とした。主に英国の舞台に焦点を絞り、中世後期から17世紀初頭までの期間において、舞台上の演技がどのようなスタイルで行われ、またどのように変化していったか、そして、役者の演技に対して、観客がどのような反応をしていたかということについて検討することを目指した。これらの問題を考察する上で、特に以下の三つの項目を調査の課題として本研究は設定した。

(1) パーソネーションという演技の様式の特徴について分析するとともに、この演技形式に対する観客の反応がいかなるものであったかについて調査を行う。

(2) 中世以来、イギリスの舞台においては常套的な身体表現の型というものが存在しているが、このような型と演技スタイルがルネサンス期の役者たちによってどのように継承されていったかについて考察する。

(3) ルネサンス期における役者の舞台上における動作やジェスチャーがどのような意味を持ち、かつそこでどのように観客への伝達が行われているかについて、演劇記号論、動作学などの学問的観点からの分析を試みる。

## 3. 研究の方法

ルネサンス期の舞台における演技の在り方と観客反応の具体的な例を確認していくために、各年度とも、当時の舞台に関する一次資料を調査・講読していくという基礎的作業をまず行った。これらの歴史的資料を収集するために、平成24年度はイギリスのパーミンガム大学シェイクスピア研究所の附属図書館において、平成25年度はオックスフォード大学のボドリアン図書館において調査を行った。

この作業を通じて、ルネサンス期の英国における演技と観客に関する全体的かつ通時的な見取図を構成していくとともに、ケース・スタディとして特に、リチャード・バーベッジとエドワード・アレンという二人の役者に焦点を絞ることで、役者から観客への情緒の伝達に関する具体例を抽出していくことを目指した。

さらに、観客反応に関する理論的な思考の枠組みを構築するために、古代から近年までにおける身体・情緒に関する研究書を調査していくという作業を行った。具体的には、弁論術、ジェスチャー等の分析に関する動作学、情動の伝達を分析した社会心理学などの領域における研究書の調査も行った。

また、平成23年において参加したプラハのカレル大学における第9回 World Shakespeare Congressのセミナーにおいては、メンバーとの議論を通じて特に認知科学

の観点から精神と身体の間を捉えていくという新しい方法論についても調査することが可能になった。

なお、各年度において、国内における学会、研究会に参加して他の研究者との意見交換を行うことによって本研究の内容の確認と修正を行うように努めた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究の主な成果

各年度の研究成果について以下に記載する。

##### 平成23年度

i) 16世紀末の英国の舞台における演技がいかなるものであったかについて、そしてその変遷の様相について考察するために、パーソネーションと呼ばれる演技に関する一次資料・二次資料の収集と分析を行った。16世紀末において登場したとされるこの演技様式の典型的な例とみなされる悲劇俳優リチャード・バーベッジの演技に関する記録を収集・調査し、このスタイルの特徴とそれが引き起こした観客反応について調査した。さらに、バーベッジの演技を相対的に捉えるために、当時のイギリスの舞台における人気俳優の一人であったエドワード・アレンの演技の在り方について同時代の文献を調査しながら考察した。

ii) 役者の演技が観客の情緒と身体に及ぼす影響を考察するための糸口として、弁論術の文献を調査した。まず、ルネサンス期の弁論術のモデルとなった古代ローマにおける弁論術に関する論考について、特にキケロとクインティリアンの著作を調査し、これらの哲学者の議論において想定されている弁論家から観衆への感情の伝達の様式について確認した。

この研究の過程において、平成23年7月にプラハのカレル大学において開催された第9回 World Shakespeare Congress のセミナー、'The Body-Mind in Shakespeare's Theatre'に参加し、セミナー・メンバーとの議論を行うことによって他の研究者の見解を参考にすることができた。

最終的に、以上の調査をまとめる形で、論文「1590年代後半のシェイクスピア作品における悲嘆の所作について」を大阪大学英米学会の機関誌『英米研究』第36号に発表した。

##### 平成24年度

i) 16世紀末から17世紀初頭までの英国の舞台における演技の形式の変遷について検討するために、平成24年度は、当時の人気役者の一人であるエドワード・アレンについての考察を昨年度に引き続き行った。平成24年9月には、イギリスのバーミンガム大学シェイクスピア研究所の附属図書館においてエドワード・アレンについての歴史的記

録の調査を行った。平成24年度は特に、アレンの身体的特徴と演じた役柄との関連性、また、ウィリアム・シェイクスピアの初期の劇作品における人物造形との関係について分析を試みた。この研究の成果をまとめたものとして、研究論文「The Aura and Shadow of Edward Alleyn」を大阪大学英米学会の機関誌『英米研究』第37号に発表した。

ii) 初期近代英国の舞台において、役者たちがどのような身体表現の型を用いて感情を表したかについて考察した。1580年代後半から1590年代前半までの演劇作品を対象として調査を行い、身体表現に関わる型の使用の状況について分類及び分析を行った。

iii) 17世紀以降において、パーソネーションのスタイルがどのように後輩役者に継承されていたかについて検討するため、バーベッジの演じた役柄を引き継いで演じたと推定されている役者たちに関する一次・二次文献を調査した。

##### 平成25年度

i) 平成24年度に引き続いて、16世紀末の英国における人気役者の一人であったエドワード・アレンについて調査を行った。アレンの演技とパーソネーションの関係性について、また、その演技の様式が後の役者たちに与えた影響について、ウィリアム・シェイクスピアの初期作品などを具体例として取り上げて考察した。9月には、オックスフォード大学のボドリアン図書館においてアレンとエリザベス朝の舞台についての文献の調査を行った。この研究の成果をまとめたものとして、研究論文「歴史、記号、スター俳優『ヘンリー六世』第1部におけるシェイクスピアの試み」を大阪大学言語文化研究科の機関誌『言語文化研究』第40号に発表した。

ii) 1590年代後半から1610年代までの英国の舞台における役者の身体表現について調査を行った。当時の劇作品を資料として扱い、感情を表す所作について種類毎に分類しながら検討した。また、感情・情緒の伝達に関する理論書を参照しながら、これらの所作が観客反応とどのように関連しているかについても考察した。

iii) これまでの三年間における研究成果を踏まえた上で、ルネサンスの英国の舞台における演技の変遷という問題について、特に所作と内面性という観点から検討を行った。

##### (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究において焦点を当てたりチャード・バーベッジとエドワード・アレンという二人の役者に関して、個別的にそれぞれについての研究は多く行われているが、この両者の関係性について詳細な議論が行われたことはこれまであまりなかったと思われる。特

に、この二人の演技についてパーソネーションという様式の継承という観点から分析した研究は私見では無く、この点において、アレンに関する本研究の二つの論文は大きな意義を持つと考えられる。また、イギリス演劇史・演技史という枠組みにおいて、エドワード・アレンという役者をパーソネーションという観点から再評価した新しい試みとして本研究は位置付けることができる。

役者研究という側面においては、日本においても本格的な研究が近年では行われるようになってきている。例えば、リチャード・バーベッジを扱った五十嵐博久先生の研究書などが挙げられる。さらに、演劇空間における役者と観客の間におけるコミュニケーション、情緒の伝達を巡る問題については、特に最近において、例えば Katharine A. Craik による *Shakespearean Sensations* (2013)、Allison P. Hobgood の *Passionate Playgoing in Early Modern England* (2014)、Bridget Escolme の *Emotional Excess on the Shakespearean Stage* (2014) などの研究書が相次いで出版されており、エリザベス朝演劇研究におけるこのような最新の動向に本研究は密接に関連したものと位置付けることができる。

エリザベス朝の英国における役者の演技と観客反応の関連性を論じる上で、これまでの先行研究において主に行われてきたのは、弁論術における議論を参考にした歴史主義的立場からのものであった。本研究は、弁論術における演者から聴衆への感情の伝達をめぐる理論をまず土台として参照した上で、さらに、演劇記号論、認知科学、動作学、情動伝達といった幾つかの理論的枠組みを参照することによって、役者と観客を含んだ演劇空間におけるコミュニケーションを多角的に解明することを目指したものとなっており、この点において新しい試みとして捉えることができる。

### (3) 今後の展望

本研究においてはエドワード・アレンとリチャード・バーベッジを中心としてルネサンス期の舞台における演技の継承の問題を扱ってきたが、この両者の間の関係性のみならず、他にも喜劇役者、少年俳優などをも含めた広い範囲における継承・影響の関係性がこの時代においては存在していたと考えられるため、より大きな視野において演技・型の伝承についてさらに考察していくことが今後の課題になる。

演技と観客の情緒的・身体的反応の関連性については、本研究においては16世紀末から17世紀までの文献を調査してデータの収集・分析を行い、さらに、具体的な考察としてエドワード・アレンとその観客たちの反応をめぐる調査を行ったが、今後はさらに他の役者たち、特にジェームズ朝の舞台における人気役者たちを具体例とした個別分析を

続けて行いながら、各例を比較検討していくことが目標となる。

また、演技と観客反応の関連性という課題をさらに細分化したものとして、ルネサンス期の舞台における共感の構築という問題について考察を行うことも予定している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

中村未樹、「歴史、記号、スター俳優 『ヘンリー六世』第1部におけるシェイクスピアの試み」、『言語文化研究』(大阪大学言語文化研究科) 査読有、40号、2014、105-122

Miki Nakamura、'The Aura and Shadow of Edward Alleyn', 『英米研究』(大阪大学英米学会) 査読無、37号、2013、49-60

中村未樹、「1590年代後半のシェイクスピア作品における悲嘆の所作について」、『英米研究』(大阪大学英米学会) 査読無、36号、2012、95-115

[学会発表](計1件)

Miki Nakamura、Seminar: The Body-Mind in Shakespeare's Theatre、9th World Shakespeare Congress、The International Shakespeare Association、2011年7月19日、カレル大学(チェコ、プラハ)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中村 未樹 (NAKAMURA, Miki)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授  
研究者番号：00324872